トンカツ、やきそば、炒飯、カレー…作ってあげたら「うめー、うめー」って食べて毎日のように作らされました（笑）。自分の好きなことというよりも自分たちのライフスタイルを凄く大事にする。その後、僕が家族を連れて行ったら泣いて喜んでいましたよ。今年も行ってきましたけど。ドワイト・ヨーク（ブラックバーン・元プレミアリーグ得点王）が住んでいた家でもあるんですよ。その夫婦は第3の息子が僕で、第2の息子がドワイト・ヨークらしいです（笑）。

―ヨーク選手とも交流があったのですか？

秋田　ヨークの周りにはいつも女性タレントがいましたね。日本でいえばアナウンサーみたいな感じです。ヨークに冗談で一人ぐらい紹介してと言ったけど全然でしたね（笑）。

―海外で学んだことはどんなことだったんですか？

秋田　最初に行った時から思っていたことは同じで。サッカーはどんなに背が低くても、どんなに背が高くてもどんなに強くてもどんなに弱くてもやれるスポーツなんですよ。例えば、100メートル13秒で走れる選手11人で対戦したら前者が勝つとは言い切れないんですよ。後者は勝つためにどうしようか考えるわけでサッカーという競技はやり方さえ考えればやれるんですよ。世界で一番人気のあるスポーツと言われるのは私はそこだと思うんです。サッカーは1人じゃなくて11人でやるわけなんですから。ただし、小さい頃からのサッカーの環境はヨーロッパと日本ではかなり違う。日本のプロは世界中から有名な監督が来て教えている。ヴェンゲル（アーセナル）、オシム（ジェフ市原）など。でも、子供たちは誰も教えない。そこが日本がよくならないひとつの原因だと思う。今一番の宝はプロ選手じゃなくて底辺の将来を担う若い選手が宝なんです。それとサッカーというのは点数を取るというスポーツなのに日本では相手の股を抜いただとか相手を何人抜いただとかが重要視されている。しかし、それは過程でありサッカーというスポーツはいかに点数を取るかというスポーツ。何が一番大切かというと点数を取るために努力する、点数を取られないために努力をするということ。そこで私はイタリアに行けたことがすごく良かったと思う。ほとんどの指導者の信念が試合に勝つためにはいかに点数を取るかじゃなくていかに失点しないかということだった。得点というのは個人の能力でいくらでもとれる。FK、ドリブル、そういうのでいくらでも崩せる。でも、ディフェンスは1人では出来ない。サッカーはディフェンスだと僕も思う。しかし、実際私が大学でやってきているチームは攻撃的なチームになってるね（苦笑）。俺の信念を誰も受け取ってくれないんだよ（笑）。

―チームはどんなチームを回ったんですか？

秋田　イギリスでいたのはアストンビラですね。練習を見たのはコベントリー、バーミンガム、ニューキャッスル、マンチェスター・ユナイテッド、リーズ、チェルシー、アーセナル、ブラックバーン、ウエストハム、ノッティンガムフォレストなどですね。オランダでは実際に練習を見たのはアヤックス、PSV、ヘンクテンカーという今、バルセロナのヘッドコーチをやっている人が監督をやっていたスパルタ・ロッテルダムですね。ヘンクテンカーは友達です。イタリアではパルマ、ミラン、ボローニャ、フィオレンティーナ、ピアツェンツァ、ジェノア、サンプドリア、トリノ、ユベントスなんかですね。

―そういうクラブを回ってどうでしたか？

秋田　パルマにはブッフォン（ユベントス・イタリア代表）とかいましたね。イギリスではアストンビラのユースを見ていたときにバッセル（アストンビラ・イングランド代表）もいました。アストンビラではミロセビッチ（オサスナ・セルビアモンテネグロ代表）とボールをいつも蹴っていました。

―印象に残っていることはありますか？

秋田　印象に残っているのはミロセビッチが「練習で頑張っても、練習でケガをしたら儲からない」と言っていたことかな。あとはアヤックスでは同じマンションにリトマネン（元フィンランド代表）なんかが住んでいたなぁ～。

―監督は好きなチームとか、好きなサッカーとかはあるんですか？

秋田　駒澤大学ですよ（笑）。まぁ、昔はレッドスター（セルビアモンテネグロのクラブチーム）が好きだったけどな。トヨタカップにも来てるんですよ。ストイコビッチ（元名古屋グランパスエイト）もいたし。とにかくうまいし俺の理想に近いサッカーをしていましたね。彼らはうまいけどチームのために何をしたらいいのかをしっかりと理解していましたね。今は低迷してしまいましたが…。本当にうまいですね。プレーはほとんど2タッチなんですがミニゲームなんかをやらせたらみんなテクニシャン。やっぱ、チームがやることを理解していると言うこと。〝ヨーロッパのブラジル〟だと言われるぐらいテクニックはみんなもっていた。けど、サッカーはそれだけじゃない。チームはどういう方針でやるのか、そのために選手たちは何をしなきゃいけないのかそれをみんなが理解していたションに選手たちははめられていた。でも、そのときの選手、ベルカンプ（アーセナル）、シードルフ（ACミラン）、ダービッツ（インテル）、クライファート（ニューカッスル）はどの国、どのチームへ行っても通用しているじゃないですか。アヤックスで型にはめられていても。それはどれだけアヤックスがしっかり教えていたかと言うこと。サッカー選手として個人の能力も大事だけどチームがどうしたいかということを理解する能力がないと世界では通用しないんです。中田英寿（フィオレンティーナ）や小野伸二（フェイエノールト）がなぜ海外で通用して、他の選手が苦しんでいるのか。中田、小野は言葉を覚えて順応しようとしているのに対して、他の選手は言葉を覚えようとしない。自分のスタイルはこうだと言っても難しいんですよ。知ってます？イタリアのある選手たちが言うんですよ。時間がなくなったらある日本の選手に絶対ボールを回さないんです。何で回さないかと言うと、言葉も通じないし、ボールをもったら必ずドリブルに行く。そこでカットされ速攻で点を入れられたら今までの苦労が水の泡になる。だから、監督もそのことがわかっているから勝っている試合は残り20分とかで必ず変えるんだよ。

【上】リーグ初優勝は監督にとっても嬉しい出来事だった。しかし、監督はそれまでの過程が一番大事だと言う【右】2001年の天皇杯・3回戦ジュビロ磐田戦は駒大サッカーの方向性を示してくれたと監督は話す

【上】監督は私たちにもわかりやすく身振りもまぜその信念を語ってくれた【右】選手には個性を大切にして欲しいと言う。ただ、全力でやるということはみな共通だと言う【左】試合中もテクニカルエリアギリギリで選手に指示をだす秋田監督

〝仲間のために勝ちたい〟そんな顔の選手を見るのが喜び

―今まで指導してきた選手で驚いた選手はいますか？

秋田　たくさんいるよ。まぁ、しいてあげるなら深井かな。でも、俺は高校一年の頃から知っていたからな。あとは山本健二（前成立高校監督）かな。あいつは160㌢もないのに180㌢ぐらいのやつにCKで競り勝ってヘディングを入れちゃったんですよ。20㌢差ですよ。本当に凄かったです。

―では、指導者として逆に選手に教えられたことは？

秋田　いつも教えられることの連続ですよ。

―例えばどんなことでしょう？

秋田　努力することとか、どんな小さなことでもあきらめないことなんかですね。あと、努力しているということはなかなか恥ずかしくて表に出せないこともある。だけど、そうしてコツコツ努力して。本当に思うのは人間は見かけじゃないということ。本当に中身。それをしっかり見てやらなくてはいけないなと思います。どんな奴でも優しいところとか、優れてるところ、いいところがみんな絶対にある。それはどこのチームでも一緒